寝苦しい

狐狸野　類

小学生だった頃の話だ。

「早く寝ない悪い子は、幽霊が連れ去りに来るよ」

私が夜遅くまで眠れないと、母は決まってこうおどかした。子ども心にはそれが酷く恐ろしかったのをよく覚えている。私はすぐに頭から足先までをはみ出さないよう布団で覆うと、目を閉じ、考えてはいけない、考えてはいけないと念じる。そうしていれば、自然と眠れたものだった。

その日はその夏でも一番の猛暑であった。夜になっても熱気は収まらず、空気に一々もやっとした不快な抵抗を覚えるような蒸し暑さ。虫の鳴き声すら細々と憔悴している。寝付くのにはあまりに寝苦しかった。二十二時を回っても寝付けず、私は布団を放り出して意味もなくごろごろと寝返りを打ち続けていたが、次第に我慢ならなくなった。

二階の自分の部屋から一階のリビングへ降りると、幸いまだ母は起きていた。

「あんた、まだ寝てなかったの」

暑くて眠れない旨を伝え、クーラーの設定温度は二十八度までというルールを侵すことを渋々承諾させた。

再び二階に上がる前、私は例によって母におどかされた。

「早く寝ない悪い子は、幽霊が連れ去りに来るよ」

私は背後に気を配りながら、足早に階段を上った。部屋の扉を閉めると、リモコンを操作してめちゃくちゃにクーラーの温度を下げる。リモコンを放ってベッドに飛び込むと、頭から足先まではみ出さないよう布団で体を覆った。

はぁ、と息をつく。心臓も荒れている。まだ暑苦しいが、すぐに部屋の温度も下がるだろう。視界はすっかり布団の中の闇に飲まれてもう何も見る心配はない。そうだ。私はいつも通りにすればよかった。目を閉じて、息を整えるのだ。考えてはいけない、考えてはいけない。念じているうちに、自然と眠りにつけるのだ。考えてはいけない、考えてはいけない。

そう心の中で唱えるのが何回目かも分からなくなったころ、ようやく私は意識を閉ざした。

どこかで、変な音が聞こえる。それは最初、時計の針の音のようにぼんやりとした意識に溶け込んでいて、それが異常な響きであることに気づかなかった。分厚い肉がゆっくりとフローリングを捉える。ぺたりと張り付いた肉が今度は引きはがされる。窓の外ではあり得ない鮮明で生々しい音。右足が張り付いて、左足が張り付いて、右足が引きはがされる。

私は布団の暗闇のなかでぱちりと目を開けた。足音が近づいてきている。それが異常であると気づいたのは、あまりにもその歩調が緩慢だったからだ。右足が前に差し出されて足の底面が全て地を捉えるまで左足が動かない。

私は夜分に泥棒でもしないような遅々とした足取りで廊下を歩く人物に一切の心当たりがなかった。そういえば、目が覚めてから酷く冷える。クーラーの温度を下げ過ぎたからか、足先から凍るように冷たいのにだらだら汗が流れる。足音が近づく。もう扉の前だ。そのとき自然とあの言葉が思い出された。

「早く寝ない悪い子は、幽霊が連れ去りに来るよ」

ドアノブに手がかけられて、ゆったりと機械的なほど緩慢にひねられる。キィーと軋みながら扉が開かれた。考えちゃダメなのに、ああ、私はどこかへ連れていかれ

てしまうのだろうかとそんな想像が決壊を始めた頭から噴き出すと同時に急に涙がでてきた。全く視界の無い中で、私はその声を聞いた。
「坊や？」
私はふあ、と間の抜けた嗚咽をもらした。
「お母さん？」
お母さんは狭い部屋を駆け寄ってベッドに這い登ると布団の上から私をぎゅうと抱き締めた。お母さんは笑っている。ふっと肩の力が抜けてもう力が入らない。安心でもう大丈夫だと分かるともう涙や鼻水は際限を失って垂れてきた。お母さんがさらに力強く私を抱き締める。また私をおどかすためだったんだ。もう言葉だけじゃ慣れたと思ったのだろうか。私はこんなに怖かったと、そう伝えたかったけれど難しい言葉はもう出てこなかった。
私はただ、
「おかあさん」
もう何も怖くないと、
「坊や」
何だか満たされていると、思った。
「おかあさん」
お母さんは布団越しにわかるくらい冷え切っていた。そうだ、今日はもう一緒に寝よう。お母さんと一緒なら大丈夫だ。
「坊やあああ」
ただちょっと、きつく締められすぎて苦しいくらいで、寝るのには障りない。

翌朝、私を待っていたのは母の怒号だった。布団をひっぺがされて一番、クーラーの温度が十八度だったことを、風邪をひいたらどうするの、と怒鳴られた。言われてみれば寒気がした。
母はいつものように朝食の支度をして、私はテーブルでそれを見ていた。お母さん、何だか少しやつれているなと思う。あの後、結局何時に寝たんだろう。母も食卓に着く。
「「いただきます」」
私は箸を持ったまま、じっとお母さんの顔を見ていた。
「どうかした？」
「きのう、あのあと……」
そう、おどかされて、抱き締められて、それから？
「徹夜で仕事よ」
ぴしゃりと言った。
「あんたこそ、あの後部屋に戻ってからちゃんと寝れたの？」
私は箸を取り落とす。寒気を思い出すかのように顎が震え始めた。怪訝そうに、お母さんが見つめる。
「あんた、幽霊でも見たんじゃないの？」